

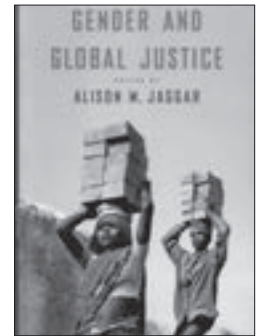
## 〈書評〉

Alison M. Jaggar編著

*Gender and Global Justice*

(Cambridge: Polity Press, 2014年 ISBN:978-0-7456-6377-7 223p US24.95\$)

中村 千鶴



20世紀後半、特に冷戦の終焉後、正義論が新たな形で蘇った。「グローバル・ジャスティス」(global justice)は、地球規模での直接的／構造的暴力を私たちの倫理観に問い、貿易、金融、環境、テロリズム対策、人道などの難題において、いかに不正義を是正するかという議論に火を付けた。しかし、そこで1つの焦点となるのは「国家」の扱い方である。正義を追求する権利を持つのは国家か個人か？あるいはローカルな集団やトランスナショナルな集団か？国家主義ないし共同体主義派と世界市民派(コスモポリタン)の主要な政治哲学者たちは激論を戦わせるが、彼ら・彼女らには共通点もある。それは、しばしば、正義を要求するエージェントをジェンダーレスに想定する点だ。

本書は2008年5月にオスロで開催された「グローバル・ジェンダー・ジャスティス」のワークショップに端を発する、8名の共著による論文集である。編者アリソン・M. ジャガー (Alison M. Jaggar) はフェミニスト哲学の草分けの1人である。2010年に彼女が編集した*Thomas Pogge and His Critics*, Polity Pressでは新進気鋭のコスモポリタン派トマス・ポッゲ (Thomas Pogge) のグローバル・ジャスティス論を様々な角度から解説し、批判することを試みている。

さて、本書*Gender and Global Justice*の基本的な問いは、「従来のグローバル・ジャスティス論はジェンダーの視点を排除してきたのではないか？」というものだろう。そこで、誰が、なぜ、いつ、どこで、どのように政治哲学から無視されるのか、個別具体的な諸問題を通して立証を行っている。

序章から第2章は、西洋政治哲学の系譜と先行研究の基本的前提を確認し、ジェンダーがグローバル・ジャスティス論において研究されるに至った経緯とその必要性を説明している。ジャガーによる序章“Gender and Global Justice: Rethinking Some Basic Assumptions of Western Political Philosophy”は、わかりやすい導入である。西洋政治哲学における正義は、①応報的正義、②賠償的正義、③分配的正義の3つに分類される。今日、多くの西洋政治哲学者の関心は分配的正義に向かっており、よって、本書の主な議論対象は分配的正義である。

さらにジャガーは、第1章“Transnational Cycles of Gendered Vulnerability: A Prologue to a Theory of Global Gender Justice”で、本書のキー概念となる「トランスナショナルなジェンダー不平等」の現況を提示する。女性の男性に対する社会的地位は、世界の地域によって大きく異なるため、女性の従属性は自然・不可避なものではないと言える。それらの差異は、どのような種類の社会的同意がジェンダー平等を促進するのかといったデータを与える役割を果たしてきた。しかしながら、ジェンダー不平等のトランスナショナルな傾向は明らかに存在し、1つの傾向はサスキア・サッセン (Saskia Sassen) の言う「グローバル無産階級の女性化」である。なぜなら、初期のフェミニスト経済学が示したように、世界的に女性の無償労働が市場セクター、そして国家を補助してきたからだ。

後の章で述べられるが、現在、貧困国から富裕国へ移動する労働力の大多数が女性である。それに伴ってケア労働やセックスワークが移転し、女性の政治参加率と識字率の低下、ハラスメントや暴力、特に性的暴力に対する脆弱さの悪化が見られるのは周知のとおりだ。ジャガーは、このようなトランスナショナルなジェンダー不平等に対して、西洋政治哲学は不十分な応答しかしてこなかったと指摘するのである。

第2章“Transnational Women’s Collectivities and Global Justice”の著者は、グローバル・ジャスティスを要求するエージェントの代表格であるナショナリストとコスモポリタンの主張を退け、「トランスナショナルな女性集団」(women’s transnational collectivities)を新たなエージェントとして提案している。

まず、ナショナリズムにおいては、国家または国家の集合体が政治的自己決定と分配的正義の主要なエージェントである。しかし、ナショナリスト・モデルはグローバル経済の多くの重要な特徴を見逃しており、国家集合体の「共通の理解」は周縁化された者たち、特に国家内の貧しい女性の声を反映していない。

一方、コスモポリタンのグローバル・ジャスティスは個人主義、普遍主義、不偏性によって支持される。マーサ・ヌスバウム (Martha Nussbaum) はジェンダー・センシティブな論者であるが、女性の捉え方に限界がある。ヌスバウムは「女性個人」を男性が独占するローカル政治と文化、そして発展途上経済の一要素として見ているのだ。

トランスナショナルな女性集団はフォーマル／インフォーマル空間の両方を網羅し、脆弱な個人による正義の要求をより可視化することができる。さらに、メンバー間のパワーの不均等が小さく、メンバーシップは無償という点で、国家集合体と峻別される。ここでは、アイデンティティ政治や共同体主義政治とも異なる、この女性集団の特徴を踏まえながら、ナショナリストやコスモポリタンから発せられるであろう疑念に反論している。

第3章から8章は、今日トランスナショナルに観察される、女性をめぐる現象と、グローバル・ジャスティス論の結合を提起している。第3章“The Moral Harm of Migrant Carework: Realizing a Global Right to Care”では、ケア労働の商品化を「グローバル・ケア・チェーンの中で起こる心の移植」と表現し、移民女性個人に対する倫理的侵害を問題視する。ケアを与え、受ける権利は自尊心にとって非常に重要なものである。この章の著者エヴァ・フェダー・キテイ (Eva Feder Kittay) はケアと正義について思索してきた研究者として知られる。

続く第4章“Transnational Rights and Wrongs: Moral Geographies of Gender and Migration”も移民とケア労働についてだが、ポストコロニアリズムやフェミニスト地理学の視点から論述されている。事例として、移民送り出し国のインドネシアにおける移民の権利獲得の活動を挙げている。2011年、インドネシア政府は人権侵害を理由に、移民女性のサウジアラビアへの送り出しを一時的に禁止する措置をとった。その背景には、海外でケア労働に従事する女性たちが受ける劣悪な待遇について警鐘を鳴らした、多くのNGOや国際機関の活動があった。ともすれば女性のケア労働者は社会で不可視になりやすい存在だったが、まさに第2章で定義された「トランスナショナルな女性集団」が正義を要求した実例であろう。

第5章“Global Gender Injustice and Mental Disorders”は、女性が精神疾患にかかりやすいグローバルな状況は構造的不正義ではないかと問う。女性の産後のうつ病、不安、拒食症や過食症などの摂食障

害は先進諸国だけでなく、急激な経済発展下にある新興国や慢性的に貧困人口を抱える国でも深刻な数字が算出されている。病の原因であるストレスは、グローバル化なしには作り出されない。従来の生産・再生産・ケア労働の三重苦に加え、「良い」母親像の流布、西洋的美に基づいた身体の商品化によって、ローカル規範とグローバル規範の狭間に置かれる女性たちの現状がうかがわれる。

第6章“Discourses of Sexual Violence in a Global Context”は性的暴力にアプローチする。著者は性的暴力が起こったときに多々用いられる概念、「同意」「被害者」「名誉」を注意深く解体し、それらがグローバルな文脈で政治的、法的、社会的にいかなる意味を發するかを考えている。性的暴力にまつわる概念に付加される意味合いは地域・文化によって様々である。それをグローバル・ジャスティス論の俎上に載せるには、本章が示唆するように、一見普遍的な個々の概念がはらむ多元性にこそ着目する作業が必要だろう。

本書の締めくくり、第7章と8章はまさしく、昨今の分配的正義の議論に切り込むものだ。第7章“Reforming Our Taxation Arrangements to Promote Global Gender Justice”は、税制度から不正義を是正するアイデア、いわゆる「グローバル・タックス」の最新動向とジェンダーを論じる。著者は、女性が税制度に包括されにくい事実を示すが、トービン税、貿易税、炭素税、航空券税、武器取引税などにグローバル・ジェンダー・ジャスティスを促進する可能性を見出す。

第8章“Gender Injustice and the Resource Curse: Feminist Assessment and Reform”は、「資源の呪い」をいかにジェンダー・センシティブに解決するかという課題に取り組む。

今日、紛争の主要な原因の1つは不透明な天然資源貿易だ。資源に富む国がしばしば直面するのは汚職、他産業の不成長、そして独裁である。しかし厄介なことに、それらの悪影響はジェンダー中立的なものではない。筆者は、フェミニストの視点を以て資源輸出国のガバナンスを測る指標を作ることを提起している。

本書は、フェミニストによる先行研究の数々に一定の評価と敬意を表したコレクションである。しかしこれまで、ジェンダー研究の多くは、必ずしもグローバル・ジャスティス論の争点にかみ合うものではなかっただろう。なぜなら、「主流」のグローバル・ジャスティス論は、あまりにも差し迫った「人類全体の」諸課題に対峙しており、ジェンダー・センシティブな議論の優先順位は相対的に低くならざるを得なかったからだ。例えばポツゲは、先進国市民は、遠くの貧しい人々に危害を加えないという「最低限の義務」(negative duty)の違反を犯していると主張している段階だ。

しかし本書は、それらの諸課題が特にトランスナショナルに女性に過度の負担をかけている現状を指摘し、また、不正義を是正する方策の理念にジェンダーの視点を取り入れるべきだと促す。非常に力強い、グローバル・ジャスティス論の新たな潮流を感じる。

一方で、第3章から8章で扱われた深刻なトピックは「トランスナショナルな男性集団」にも特有の脆弱性を与えているかもしれない。近年、スーダン、ソマリア、コンゴ民主共和国などで軍事戦略としての性的暴力が男性を標的にしたケースが明るみに出た。アフリカの多数の国で同性愛禁止法や一夫多妻制法が敷かれているなか、男性の性的暴力被害者は、同性愛者だと思われるのを恐れ、沈黙してしまうことが多いそうだ。グローバル・ジェンダー・ジャスティス論のさらなる成熟を期待したい。

(なかむら・ちづる／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
ジェンダー社会科学専攻博士前期課程)